

2015年「看護の日・看護週間」

救われた
言い方

今年で25周年!



看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

最後の
約束

掌に託されし
願い

ナイスの
ナース

大きくなったら
何になりたい?

人の温かさに
触れた時

小さな
奇跡

真夜中の
ほうじ茶

心の中に
いつまでも

エンゼルの
わが子

心の医療を
目指して

忘れられない
笑顔

見えない
やさしさ

魔法に
かけられて

わすれられない
たん生日

第5回 「忘れられない看護 エピソード」集



公益社団法人 日本看護協会

今年で25周年!



はじめに

5月12日は「看護の日」です。

近代看護を築いたナイチンゲールの誕生日にちなみ1990年に制定されました。それ以来、「看護の心をみんなの心に」をメインテーマに厚生労働省と日本看護協会の主催で、毎年さまざまな事業を全国各地で行っています。

2015年度は、第5回「忘れられない看護エピソード」を看護職と一般の皆さまから募集。3,536通の応募の中から、特別審査員の内館牧子さん(脚本家)、ゲスト審査員のホラン千秋さん(「看護の日」PR大使)らによる、よりすぐりのエピソードを20作品、ここに収録しました。今回は「看護の日」25周年特別賞を設け、桜沢エリカさん(漫画家)に受賞作品を書き下ろしていただきました。

ケガや病気で入院したり、ご家族に付き添ったり。

患者さんやご家族にとっても、看護にあたる看護師にとっても、心に残り、ずっと人生を支えてくれるような看護体験があります。

その後の人生を生きていく糧となるような、忘れられない言葉をもらうこともあります。

看護は、人生を変えることだってあるのです。

看護にまつわる感動のエピソードが、生きる素晴らしさを思い、明日を生きていく力を生み出すきっかけになれば幸いです。

公益社団法人 日本看護協会

看護職部門

〔目次〕

「最優秀賞」

4 エンゼルのわが子へ

「内館牧子賞」

5 愛が、かかっている

「優秀賞」

6 「二口」の満足のためにできること

7 最後の約束

8 小さな奇跡

「入選」

9 掌に託されし願い
yogoya

10 忘れられない笑顔

11 大きくなったら何になりたい？

12 ドングリに託された思い

エンゼルのわが子へ

〈沖縄県〉 平安 香由美 60歳
ひらやす かゆみ

「かわいい、可愛い、お母さんにお産の経験をさせてくれてありがとう。○○ちゃんのことはずっと忘れないよ。また会えるからね」と母親と父親は交互に小さな赤ちゃんを抱っこしながらとめどなく流れる涙を拭うことができなかった。

十年間の不妊治療後、やっと妊娠しその夫婦は喜びの絶頂にいた。しかし、妊娠十週に入ったときエコーに映る胎児に異変を指摘された。胎児水腫^{たいじすいしゅ}だった。生存確率がほとんどなく、多くは子宮内で死亡するため、妊娠途中でお腹の中の赤ちゃんを外に出す処置が施された。

母親は痛みと悲しみの苦痛の中、赤ちゃんは心臓の止まった状態で黒い皮膚の色で生まれてきた。首

の周りが水ぶくれのように異常に膨れ上がり、全身プロヨして数カ所の皮膚がめくれ水分がたらたら流れ出ていた。

主治医はその赤ちゃんの姿を見て

「母親に赤ちゃんを会わせる前に、父親の思いを聞いてください」と氣遣った。父親は兄と対面した直後、何の迷いもなくきっぱりと言った。

「私たちの子です。母親にも会わせませう」

「会わずに別れることがもっと辛いことですからね」

この夫婦は赤ちゃんが生まれる前から決めていたのだろう。どんな姿で生まれてきてもぜひ抱っこしてあげたいと。

赤ちゃんの肌からにじみ出る水

分をガーゼで巻いた綿に受け止めさせ、温めたバスタオルでくるみ父親に抱っこしてもらった。その後、母親との対面になった。その時の母親の第一声が冒頭の言葉であった。

助産師になつて37年間、このような対面は初めてだった。これまでの経験では、父親は母親に赤ちゃんを会わせることを拒み、母親も会うことは辛いからと対面しないでの別れが日常であった。母親は私に「子宮筋腫の手術を受けているのでお産は帝王切開しかないと言われていました。この子のおかげで普通のお産を経験でき感謝しています」と言った。エンゼルになったわが子への愛があふれていた。

愛が、かかっている

〈愛知県〉 小林 美和 こばやし みわ 44歳

淡いピンクの花柄パジャマがとてもお似合いになる晴子さん。少し首をかしげてベッドに佇むたぐそのお姿は、私たち看護師をゆつくりとした時間の流れへと誘うものでした。

西日が少し厳しい夕暮れ、カーテン越しに振りそぐオレンジ色の淡い光は、晴子さんを温かく包んでいました。

晴子さんのパジャマの袖口からは、真っ白でぽてぽてとしたふくよかな両手が伸びています。重ねた両手の先には、安心手袋と称したミトンがかぶせられていました。しかし、それさえも受け入れているかのように、晴子さんは何もいわず穏やかに佇んでいました。

晴子さんは認知症。点滴を何度

も自分で抜いてしまったり、大切な管を抜いてしまいそうなが続いた晴子さんは、医師からの指示でご本人と家族の了承の上、前日からミトンをされていました。看護師が晴子さんの状況を見て外してよいことになっていました。

私は、そのミトンをそつと外しました。晴子さんは、無言でうなずくように頭を下げました。私のほうが、なんだかばつが悪い感じがしたのか、その場を取り繕うように晴子さんの手をさすりしました。「ごめんなさいね……。嫌だったでしょう……」

晴子さんに、検査出棟の指示が出ました。慌ただしく動き回る私たちにも文句ひとつ言いません。むしろ優しい笑顔で私を見つめてくれてい

ました。ベッドを検査室へと移動し始めました。エレベーター待ちをしながら私は、晴子さんの布団が腰までしか掛かっておらず、ぽてぽてとした両手がパジャマの袖口から出てしまっていて、寒そうに見えました。

「晴子さん、お布団掛かってなくてごめんなさい。手が冷たそうだから。お布団掛けましょうか……」と、布団を掛けながら両手を布団の中へ入れようとすると、晴子さんは、「愛がかかっているから、大丈夫……。寒くないよ、ありがとう」。

私は、涙が止まりませんでした。エレベーターホールに愛がふりそそいだ瞬間でした。私の方こそ、晴子さん「ありがとう」。

「一口」の満足のためにできること

〈北海道〉上野 由利子^{うえの ゆりこ} 55歳

私が看護教員として実習指導していた時、出会ったAさん。Aさんは食道がんの治療のために、5カ月間絶飲食を続けていた。がんは肺にも転移し、せきや痛みなどの症状を抑えるためにモルヒネを使いながら生活していた。

やっと水分とゼリーの経口摂取の許可が出て、昨日最初の一口を飲んだという情報から、私はさぞおいしかったろうと思い、「昨日の水の味は、どうでしたか」と尋ねてみた。

意外なことに「飲みたくない時に先生から『飲んでみて』と言われて飲んでもね」という返事であった。そうだった。飲みたい、食べたいという当たり前の欲求は、欲する時に欲するものを口にするのでなければ

ば満たされない。それならば、今日は何としても、満足できる一口をAさんに摂ってほしい。

学生との話し合いの結果、Aさんが好むものをAさん自身に選んでもらう、身綺麗にすることを好むAさんに洗髪と足浴をして、さっぱりしたところで水分とゼリーを摂ってもらい、それにはモルヒネが効いて落ち着いている午後がいい、と決めた。さっそくAさんにその計画を提案し、承諾していただいた。ベッドに横たわる時間が多いAさんに、何とか笑顔を取り戻してほしかった。Aさんが売店で選んだのは、イチゴ味の乳酸飲料だった。洗髪と足浴で「女王様になったみたい」と言っていた後、いよいよ今日の二

口。初めて見るAさんの満面の笑顔。指導者である看護師が「どうですか。今日の一口は」と問うと、Aさんはあの北島康介選手の台詞^{めいぜりふ}を口にした。

「何も言えねえ」

周りの学生も指導者も思わず笑った。その笑い声が部屋から漏れて、キラキラ光っていた。表情をなくしたAさんの心が溶けて、今、満たされているようだった。温かく柔らかな時間が過ぎた。

卒業前の最後の実習で、学生たちの成長した姿をうれしく思い、看護教員として、かけがえのない、ありがたい時間となった。そしてAさんには、「一口」の重みを教えていただいた。

最後の約束

〈群馬県〉佐々木 典子^{ささき のりこ} 41歳

「俺は生きてる意味があるのかな」

いつもと変わらない夜勤の日に、ふ

と、Tさんが私に言った。Tさんから
は想像もできない言葉だった。妻には
いつも、亭主関白な態度で接してい
たのをよく見ていたからである。前
立腺がんの告知を受け、手術、化学
療法を続け頑張ってきた。しかし、
他臓器への転移もあり、回復が困難
なことの告知を新たに受けていた。

呼吸苦があり、酸素吸入を開
始、排泄感覚も分からなくなり、
時間を見計らっておむつ交換を行っ
ている状態まで悪化していた。そん
なTさんが、本当の気持ちを語った
のである。「今、何が一番つらいで
すか?」とそっと聞いた。

「自分で何もできないで生きる
ことだよ」。その時、Tさんと最初の
約束をした。

「私はTさんにつらい思いをして
ほしくありません。一緒につらいこ
とを取り除いていきたいです。私、
頑張りますから。そのかわり何で
も話してくださいね」

「俺と頑張ってくれるんかい、あ
りがとう」

きつと、体もつらかったのだろうと
思う。それから、夜間だけは素直な
Tさんにな変わった。

しかし、1カ月後、私は看護教員
への道が決まった。Tさんと約束し
たことが守れなくなってしまったの
だ。今の状態でTさんと離れるの
は、とても心残りがあった。私はTさ

んに本当のことを話すことにした。

「Tさん。私ね、来月から看護学校
の先生になることになったんです。一
緒に頑張る約束したのに、守れなく
て本当にごめんなさい」。すると、酸
素マスクを外してTさんは言った。

「Sさんみたいな看護師さんをた
くさん育ててくれ。俺はもう大丈
夫だから。ここの看護師さんはみん
ない人だから、心配いらないよ。そ
のかわり今度はそれが約束だ」。そ
う言うのと、再び酸素マスクをして目
を閉じて呼吸を整えた。退職して
すぐにTさんは亡くなった。

私は、看護師としてTさんから
最高の言葉をいただいた。そして、
最後の約束を胸に今日も学生にT
さんの思いを伝えている。

小さな奇跡

〈徳島県〉徳永 亜希子 とくなが あきこ 40歳

Aさんは末期がんだった。Aさん

には婚約者の彼女がいた。ある日、彼女から「彼の残された時間は少ないですよね。明日、役場に行って婚姻届を出してこようと思います。本当は一緒に行くつもりだったけど、私一人になりそう」と告白された。

Aさんは40代、自分の病状を理解し、「死ぬのは怖くない。運命だと思っ

や結婚式の準備に取り掛かった。

翌日、何も知らされず、酸素をしながら車いすで会場に連れてこられたAさんは、人目とはばからず大きな声で男泣きをした。そして、赤いドレスに身を包んだ花嫁をうれしそうに見つめていた。結婚指輪が間に合わなかつたので、お互いの手首にピンクのリボンを巻き、永遠の愛を誓った。栄養課が用意してくれたウエディングケーキを、Aさんは美味しそうに口いっぱいにはおぼつていた。それまでは食事のどを通らない状態だったのに。

ふと目が合うと、うれしそうにほほ笑んだAさんの笑顔が今でも忘れられない。

その日から小さな奇跡が起こっ

た。一時的にモルヒネの点滴や酸素も外し、外出ができるようになった。家に帰り遺産相続のことも話ができたと安堵し、彼女と穏やかな時間を過ごした。

式から2週間後、Aさんは永眠されたが、しばらくして、彼女から手紙が届いた。手紙には「棺のなかの彼の手首に、結婚式の時のピンクのリボンを巻いてあげました。私の分はお守りとして、大事に持つておきます」と書かれていた。私たちの心がじんわり温かくなった。

「本当に大切な緩和ケア」をAさんや彼女、そこにいたスタッフを通じて教えてもらった。誰かを大切に思う気持ちは、時に小さな奇跡を起こすのだと思う。

入選

掌に託されし願い

〈長野県〉 川手 弓枝 かわて ゆみえ 42歳

トミさんは、学生最後の実習で出会った末期がんの患者さんだ。体調が良い日は車いすで散歩をして、一緒に山を眺めた。自宅があるあの山の向こうには、トミさんの人生が詰まっている。旦那さんが生きていたころや戦時中の話など、大切な思い出を聞かせてくださった。人生の大切な宝物を分けていただいた気がして、感謝の気持ちでいっぱいになった。

束をすると、「来てくれるのをずっと待っている」と言つてようやく笑つた。「合格発表の日はいつだ？ カレンダーに印付けてなあ」と、うれしそうに頼まれた。

再び実習先を訪れたのは、奇跡の合格から一週間後。看護師長さんから、トミさんのカレンダーにある印は何かと尋ねられた。ご本人の希望で、合格発表の日に印を付けた経緯をお話した。師長さんはひどく驚き、「その日、トミさんが亡くなったの。前から悪かったのに、その日まで頑張っていたんだね」と涙した。一生分悔やんでも、トミさんにお詫びする術が無い。患者さんにとつて、「一日が貴い時間であること、共に過ごす時間はかけがえのない

ものであることを、胸貫く痛みと共にトミさんが教えてくださった。山の彼方かなたを見つめるトミさんが、「帰りたいなあ」とつぶやいたことがあった。まるで願いを込めるかのように、ギュッと私の手を握つた。託された願いが、私の掌に宿つた瞬間だった。この時からだ、患者さんが望む場所で最期を過ごせるような看護をしたい、と考え始めたのは。掌に託されし願いは、目指す看護の原点になった。時が経ち、地域・在宅看護を専門領域とした。在宅療養される方の貴い時間とかけがえのない日々と向き合い、「ありがとうございます」と感謝申し上げている。

入選

忘れられない笑顔

食道がんのEさんは、手術後に病状が悪化してICUに入った。ICUではベッド上の生活が1カ月以上続き、回復して私たちの病棟に戻ってきた時には寝たきりで笑うことも無かった。

そこで私たちはEさんが1日でも早く歩けるように、理学療法士と共に計画を立てリハビリをした。私たちはEさんのためにと毎日躍りになった。けれどEさんは無気力に「やりたくない」「疲れた」と繰り返すばかりだった。

どうしたらEさんに笑顔が戻るのかな。悩む私に先輩が「Eさんはお風呂が好きだと、奥さんが言っていたけどいつ入れるかな」と声を掛けてきた。「今は入れないんですか」。

私はすぐに質問した。「うーん、今は難しいな」という先輩に、他の看護師も「無理だよ」「危険だね」と続いた。私もそう思った。その時、同僚が「今は無理でも、目標にすることはできますか」と言った。「それいいね」「準備しよう」「時間は短く」「人数も確保して」「Eさんの体力向上も」と、どんどん続いた。その日の話し合いはとてもワクワクした。

3週間後、医師の許可を得ることができた。そのことを伝えると、Eさんは驚いた顔で「本当！僕はほとんど立てないのに」と半信半疑だった。私たちは「大丈夫。私たちがいます」と胸を張って答えた。翌日に無事入浴したEさんは、ほっ

とした表情で「ありがとう」と言った。私たちも介助がうまくいき大喜びをした日だった。Eさんは入浴をきっかけにリハビリに意欲的に取り組み、なんと2カ月後には歩いて退院できた。退院前日、Eさんは私に「あの時はありがとう、初めてお風呂に入った時は夢みたいだったよ」と満面の笑顔を見せてくれたのだ。あの時の笑顔は今でも忘れられない。

このできごとで、看護力とはチームの力であることを知った。Eさんの笑顔は私一人では取り戻せなかった、チームで取り戻したのだ。そして、患者さんの笑顔は私たちの原動力である。

〈愛知県〉森本 綾 もりもと あや
39歳

入選

大きくなったら何になりたい？

〈愛媛県〉山里敬一郎 37歳
やまざと けいいちろう

「大きくなったら何になりたい？」

5歳の娘にそう聞かれた時、私は思わず自分の胸に手が行った。子どもにはそういった質問をよくするけれど、この年齢になって逆に聞かれるとは思ひもなかった。高校生のころ、当時好きだった子が看護学校を目指していた、といった理由からこの道に進んできた私。何度も後悔しながらも、やっぱり辞めずに看護の道を歩き続けていけている原動力は果たして何だったのだろうか。

先日、帰省した際に本棚の奥から発掘した小学校の卒業文集には、将来の夢の欄に「通訳者」と、拙い私の字で書かれていた。私ははっとさせられた。

日々の業務の中、自然な形で、毎

日のように医師の説明を患者さんにも分かるように噛み砕き説明したり、逆に患者が言わんとしていることや、方言などを翻訳してその意図をフォローして医師に伝えたりしているのではないか。また、糖尿病教育にチーム医療で携わる中で、多職種間のそれぞれの情報共有を図ったり、退院調整で医療ソーシャルワーカーを通じて他医院や施設とのコンタクトを取ったりと、いわば「医療の通訳者」として、私は働いているのではなからうか？

思いを他の方に伝える、思いを共有する。そして上手く伝えられたときに達成感本物の通訳なりわいを生業とする方々と相通じるものではないだろうか。子どものころに描いてい

た理想とは形は違えども、子どもころ憧れていた通訳の仕事で働いている私を、子どもころの自分は、そして娘はどう評価してくれるだろうか。

今私は、糖尿病療養指導士の資格取得に向けて日々勉強、研鑽けんさんを重ねている。いわば糖尿病患者と医療スタッフ間の通訳者だ。近いうちに娘に「大きくなっても、今でも通訳者になりたいよ」と、胸を張って答えてみよう。きっと、きょんとした顔をされるとは思うけど。

ちなみに娘の夢は「やさしい看護師さん」とのこと。夫婦で看護師の私たちとしては、苦笑いしつつ、小さな通訳者の成長を温かく見守ってあげたい。

入選

ドングリに託された思い

〈兵庫県〉横山 里実 よこやま さとみ
50歳

「私、胆のうにがんができたらしいの、家に帰れるかな……」初めてHさんと言葉を交わした時に、悲しげに話された。Hさんは日ごとに動けなくなり、ベッドに横たわっていることが多くなっていた。

秋晴れのある日、いつものように活気がなくベッドに横たわっているHさんに声を掛けてみた。

「今日はすごくいいお天気で外は気持ちがいいですよ、たまにはお日様にあたってみませんか？」

「えっ、いいの？ 散歩に行けるの？」

「大丈夫、私がお手伝いしますから行けますよ」と伝えると、Hさんは笑顔で車いすに乗り込んだ。笑顔は見せてくれるものの、熱や痛み

などの症状が無いわけではない。病院の玄関を出て日向ぼっこができる最も近い場所で車いすを止めた。

「ほら、お日様ひさまで気持ちいいですよね、たくさん元気をもらえる気がしますね」と声を掛けると、Hさんはお日様に手をかざした。

「あゝ気持ちがいい、ありがたい、ありがたい、二生の思い出……」と涙ぐみながら日差しを浴びていた。

「もう秋ですね、病院で自慢のドングリの木があるんですけど、ドングリ拾いしてみませんか？」と声を掛けると、Hさんは良い笑顔を见せてくれた。近くのドングリの木の下に案内し、ドングリを3つほど拾ってHさんの手のひらに乗せて部屋に戻った。ほんの10分程度の散歩だ

った。

Hさんはその冬に亡くなられ、その記憶も薄らいだある日、息子さんが来られ「母が入院中に大切にしていたドングリを庭に植えたら、芽が出てきたんです。大切に育てるつもりです」と話してくれた。

ドングリってあの時の？ 私はあの時の記憶がよみがえった。ボカボカお日様や心地よい風、手にすると笑顔になったドングリ、あの時Hさんが言葉にしたように本当にHさんには「二生の思い出」に結びつくものとなっていた。そして、家に帰ったかっつたHさんの思いはドングリに託され、自宅の庭で息子さんに大切に育てられている。

一般部門

〔目次〕

「最優秀賞」

14 ナイスのナース

「内館牧子賞」

15 わかる、わからない、より「わかりたい」

「優秀賞」

16 人の温かさに触れた時

17 心の中にいつまでも

18 心の医療を目指して

「入選」

19 見えないやさしさ

20 真夜中のほうじ茶

21 救われた言い方

22 残された紙おむつ

23 魔法にかけられて

「看護の日」25周年特別賞

25 わすれられないたん生日

ナイスのナース

「ナイスナイスの球子さん、おはようさん」

今日も、この一言で始まります。

声の主は、看護師になって間もないTさんです。妻が病魔に苦しめられていた時、この一声にどれほど励まされ勇気付けられたか分かりません。

認知症の妻は、最近めっきり体力も弱まり、入退院の繰り返しでした。今年は珍しく体調も良く安心してた矢先、秋口に風邪をこじらせ高熱が続くので、急きょ入院しました。

主治医に「重症の間質性肺炎」と診断され、すぐ集中治療のできる個室に移されました。病室には、2種類の点滴スタンドと、心電図、

脈拍、酸素濃度などの計器が所狭しと並べられ、緊迫した重苦しい空気が漂っています。

こんな時、天使のように訪れるのはTさんです。計器の数値を丹念に記録すると、「熱も下がり顔色も良くなったわ。ナイスナイスですよ、球子さん。頑張つてね」と、病状を伝えながら力付けてくれます。皮膚が固くなった腕に点滴の針を刺す時には、「ごめんなさいね、痛くて。頑張つてくれてありがとう。やっぱりナイスナイスの球子さんだわ」と、優しく声を掛けてくれます。何気ない一声ですが、これで痛みも少し和らぐようです。

Tさんの気配りは、言葉だけではありません。声を掛けるときは、必

〈東京都〉川添 芳身 85歳
かわぞえ よしみ

ずベッドのそばにしゃがんで目線を同じくし、やさ細つた手を撫でるようにして握っているのです。よく見ると、妻の口元がかすかに動き、涙ぐんでいます。あまりのうれしさに、「ナイスのナースさん、本当にありがとうございます」と、精いっぱいのお礼を伝えていくようです。看護の神髄に触れ、Tさんにかのナイチンゲールを重ねていたのでしょうか。

はらはらと紅葉の散る11月の末、妻はTさんの手厚い看護に、いとも申し訳なさそうな顔をして息を引き取りました。おそらく、「こんなに優しくしていただいたのに、応えられずにご免なさいね、ナイスのナースさん」と、詫びつつ感謝していたのかもしれない。

内館牧子賞

わかる、わからない、より「わかりたい」

〈北海道〉菅原 里佳^{すがわら りか} 43歳

おじいちゃんが、孫である私のこ

とをわからないと言いはじめてから、あつという間に誰のことかわからなくなり、そして一言も口を利かなくなるのに1年もかからなかった。病院へ行つて調べたら、最近聞くような病名ではなく、当時の説明では、年齢的にそうなるってしまう方が多いと言われたと母が困り顔で話してくれた。

私は小学4年生だったので、おじいちゃんがおじいちゃんてなくなるのが信じられなくて、話し掛けでも、肩をたたいても「まつしろ」な感じで「誰でもない」感じでそれを受け止めることはできなかった。そして、おじいちゃんは精神科に入院した。

お見舞いに行くと、看護師さん

がおじいちゃんの毎日の様子を教えてくれた。でも、いくら声を掛けても、2人であれだけ観察しておしゃべりした田んぼの稲の様子を伝えても、「まつしろ」な感じのまま。わからない、おじいちゃんが何を考えているのかわからない。正直、子どもの私には変わり果てたおじいちゃんが怖くなっていた……。

何度目かのお見舞いの時に、看護師さんが「今日はおじいちゃんの気持ちを聞くゲームしてみよう」と私を誘ってくれた。紙と鉛筆を用意してくれて、おじいちゃんに手渡してくれた。おじいちゃんはしばらく動かなかったけど、やがて紙に漢字だけを書き連ねた。4年生の私

には読めない漢字ばかり。

でもその中に「孫」「稲」という文字を見つけた。看護師さんに「おじいちゃん、まつしろじゃなくて本当はわたしのことわかつてるのかもしれない!」と興奮して言うと、「わかる、わからない、よりわかりたい気持ちがあればきっと伝わると思うよ」と笑ってくれた。

それからおじいちゃんは、「まつしろ」から「透き通った」感じに変わっていった。もう紙と鉛筆を渡しても、字を書くこともなくなった。それでも、看護師さんが「わかりたい気持ち」を伝えてくれたから寂しくなかった。返事がなくても、おじいちゃんとおしゃべりは楽しかった。

人の温かさに触れた時

〈埼玉県〉福山 恵美子 31歳

「ガシヤーン」……。

私は高速道路で事故に遭遇したのである。まだ小学校4年生であった。お正月の三が日が過ぎ、父が運転する車で父母・親戚を含め7人で宮城の祖母の家からの帰路であ

った。まだ夜が明けぬうちのできごとだった。走行している車の後ろから4トントラックが追突してきたのである。追ってくるトラックに父は恐怖を覚えたという。車は原形をとどめず、お腹と背中がくついたように潰され、私は運良くバックガラスが割れたおかげで外に放り出され、九死に一生を得た。両親も親戚も皆無事であった。ドラマのワンシーンのように救急車が二列に並んで赤いランプが光っていた。私はスト

レツチャーの上で気を失った。目が覚めるとそこは病院の天井であった。私はその事故で右上腕骨頭を骨折していた。それからが壮絶な日々となった。

ストレツチャーに乗せられ病院の検査室に入ると、医師は私の折れた右肩をなんと麻酔もせずにグルグルと回し始めた。私はギヤーギヤー泣きわめき、その時の激痛は何にも例えようがないほどの地獄絵図であった。

そんな時、そばにいた看護師の方が「痛さと同じくらい私の手をちぎりなさい」と言った。これでもかというほど、その痛さに身を任せ、小学生であった私は左手で看護師の前腕を思いつきちぎり引つかい

た。ふと看護師の顔を見ると、痛いであろうにひとつも嫌な顔も痛い顔も見せず、反対に私にほほ笑んでいた。そして「痛いね、痛いね」と共感し励ましてくれていた。

私はあの時、看護師の方の温かい優しさで芯の強さに触れ、人を思う看護の姿を垣間見させてもらうことができた。

「使命」……。自分の命を何に使うか。私もあの看護師の方のように苦しんでいる人のそばで自分の命を使っていきたい。それがきつと

助けていただいた方々への恩返しになると思い、事故から20年の時を経て、現在、私はナースのたまごになった。いつか成長した姿を見てもらいたいと願いつつ。

た。ふと看護師の顔を見ると、痛いであろうにひとつも嫌な顔も痛い顔も見せず、反対に私にほほ笑んでいた。そして「痛いね、痛いね」と共感し励ましてくれていた。

私はあの時、看護師の方の温かい優しさで芯の強さに触れ、人を思う看護の姿を垣間見させてもらうことができた。

「使命」……。自分の命を何に使うか。私もあの看護師の方のように苦しんでいる人のそばで自分の命を使っていきたい。それがきつと助けていただいた方々への恩返しになると思い、事故から20年の時を経て、現在、私はナースのたまごになった。いつか成長した姿を見てもらいたいと願いつつ。

心の中にいつまでも

〈東京都〉景山 早恵 かげやま さえ 43歳

12月3日は私たち家族にとって、

娘が誕生した日の次に大切な記念

の日です。初めて娘を抱っこした日

です。4人の看護師さんの力を借

りて保育器から出してもらい、よう

やく腕にした娘は小さい体の割に、

ずつしりと重みがあり驚いたのを

覚えています。親子3人の写真も

撮りました。

娘は、その18日前、2012年

11月15日に予定日より2カ月早く

生まれ、NICU（新生児集中治療

室）に入っていました。生後1カ月こ

ろまでは順調に見えましたが、感

染症にかかってから、ほかの症状も

重くなっています。

ある日、看護師のKさんが提案

しました。

「恵ちゃんがいいつでもママとパパ
に会えるように、保育器にママとパ
パの写真を貼りましょう」

迷わず抱っここのときの親子3人

の写真を貼りました。実のところ、

娘に見えるのだろうか疑問

でした。

「恵ちゃん、写真を見えています

よ」

Kさんの言葉にうれしくなりま

した。

その年の末、残された2つの治療

方法のうちの1つ、交換輸血をし

ました。感染症はなくなりません

でしたが、どうにか持ちこたえた娘

は、初めての年賀状をKさんから

もらうことができました。

Kさんは、手作りのかわいらしい

カードを何枚も作ってくれました。

生後すぐ、お誕生おめでとうのカ

ード、生後1カ月、2カ月のカード、

どのカードにも娘の写真が貼ってあ

り、Kさんたちのメッセージも添え

られています。今も私たちの大切

な宝物です。

娘は、72日間というあまりにも

短かすぎる人生をNICUという

小さな空間で過ごしました。でも

そこには、Kさんをはじめ、娘にた

くさんの愛情を注いでくれる看護

師さんがいました。娘を囲んで、K

さんたちと交わした会話やその光

景は、今も鮮明に覚えています。

娘は、Kさんたちと共にいつまで

も、私たちの心の中に生き続けて

います。

心の医療を目指して

〈広島県〉森本 愛美^{もりもと まなみ} 17歳

「食べろ。食べろ。食べたなら元気になるからな。早くに家に帰ろうな」

これは、ある病院で行われたふれあい看護体験に参加した時、私が聞いた言葉です。おじいさんが、入院中のおばあさんを見舞い、その時、出されたゼリーを食べるよう声を掛けていました。頭をなで、肩をもみ、優しいまなざしで励ますおじいさん。おばあさんは体を動かすことも表情を変えすることも難しい状態でした。前日はようやく二口食べられたそうです。ですがその日、おばあさんはおじいさんの言葉や思いに応えるようにスプーンを握り、ゆつくりと口に運び続け、全て自分で食べきったのです。

気が付くと、私は涙を抑えるこ

とに必死になっていました。

幼いころの私は体が弱く、体調を崩すとたびたび入院していました。入院中の私のそばには、いつも家族や友達がいてくれました。面会時間が終わり皆が帰った後は、看護師さんがずっと私のそばにいてくれました。点滴のガーゼにキヤラクターの絵を描いて楽しませてくれた記憶もあります。

人のそばに人がいる。幼いころの私の入院生活が、老夫婦の姿と重なり合いました。

家族、そして看護師には「器具を使わない医療」の力があると思います。その人を思いサポートする日々の営みは、体のみならず心^{こころ}を癒すのです。私自身がそう

であったように癒しは安らぎとなり、その積み重ねが病と向き合うエネルギーや意思を生み出すと思います。それは、人によってもたらずことのできる医療だと考えています。

今春、私は高校3年生になります。幼いころ私が与えてもらったぬくもりを看護師になり、病と闘う子どもたちに届けたい。小児科の看護師になることは、幼いころから変わることはない私の夢です。温かい看護師に、私はなりたい。これまでも出会い支えてくれた人たちの思いを胸に、これからも学び続け、そして人と共に生きていきます。

入選

見えないやさしさ

幼いころから、病院で行われる出来事が怖くて大の病院嫌いの私。その上、極度の怖がりで血を見ることはおろか、点滴や採血の針が皮膚に刺さっている状態を見るだけで気分がスーッと遠のいてしまう「迷走神経反射」が起きてしまうほど、医療行為がとにかく不安で怖いのです。

そんな私が手術のために入院するなんて！まさに想像を絶する事態であり、毎日落ち込むばかり。

K病院では「入院オリエンテーション」といって、病棟看護師が入院に伴う事前説明を目的とした面談をする仕組みがありました。

オリエン当日。多忙な病棟看護師にとっては、点滴や採血などは日

常の業務のせい、きつと私の不安などは瑣末な訴えだったのでしょうか。思いがけずさりと形式的な面談をして終わったように感じました。

その面談から1カ月後、私は入院し手術の日を迎えました。

術後の処置が終わり、たくさん管につながれた自分の姿を確認しました。鼻の管、背骨に入った硬膜外麻酔、ドレーン、尿の管、そして左手にはなぜか包帯が巻かれていました。

なぜ？と思い、翌日、担当になった看護師に左手の包帯の理由を聞いてみました。すると、包帯は「点滴針の刺入部が見えないように巻いておきましたよ」との返事。

〈東京都〉遠山 健 43歳
とわやま たけし

1カ月前の面談時、私の小さな訴えが「あのときの」看護師にちゃんと届いていたのだと、記憶の糸がつながったのです。面談をした看護師から担当看護師への申し送りリレーで、不安の大きな私に対処するために点滴針が刺さっている場所を見えなくする方法（包帯）を考えてくれていたようなのです。

1本の包帯による見えない「やさしさ」。

病氣治療はたしかにつらいものですが、今回入院したことで看護師さんから多くの優しさを感じました。同時に仕事の大変さも知りました。そう思った時、あれほど怖かった医療行為を乗り越える力が湧いてきました。

入選

真夜中のほうじ茶

〈福岡県〉米澤 泰子 よねざわ やすこ
59歳

真夜中の病院の廊下に軽い足音がして、母と私のいる個室を軽くノックする音が聞こえた。

その日（正確にいうと前日になるが）21歳の私は、8時間におよぶ背骨の手術を受け、個室のベッドの上で苦しい手術第1日目を過ごしていた。手術そのものは順調に終わったのだが、若い人には極力輸血をしたくないという先生の方針で、ぎりぎりのところで輸血をしなかったために、猛烈な吐き気に襲われて私はベッドでぐったりしていた。まだ自己輸血の行われていなかった時代である。

ノックの音に、母がドアを開けるとその日の当直の看護師のWさんが入ってきた。Wさんは30歳前後

の落ち着いた物静かな感じのする人だった。彼女は点滴のバックを確かめ、私の脈をとり「苦しいけど、吐き気は1日か2日で必ず治まるから、もうちょつと辛抱してね」と言いながら私の手をギュッと握ってくれた。その手はやわらかく温かだった。

「こんな夜中まで来ていただいたてありがとうございます」。母が深々と頭をさげた。Wさんは「私たちはこれから仮眠できるけれど、お母さんは「晩中眠れないでしょうから」と言いながら、良かつたらと母に小さなお盆を差し出した。

お盆の上には、湯気の立つほうじ茶と小さなおまんじゅうが乗っていた。朝から緊張のし通しだった母

は、温かいほうじ茶を飲み、添えられたおまんじゅうを口にして、ようやく心地がついたという。ほうじ茶の香りは、心配と疲れでへとへとになっていた母の心に、小さな元気と勇気を運んでくれた。

「あのときは本当にうれしくて、Wさんの姿がナイチンゲールのように思えた」。母は後々までずっとそう言っていた。患者を看るだけでなく、付き添いの家族の不安や苦しみに寄り添い、それをさりげない形で和らげてくれたWさん……。一杯の温かいほうじ茶に込められた思いやりと優しさを、母も私も40年近くたつ今でも忘れたことはない。

入選

救われた言い方

〈埼玉県〉 渡邊 広子 わたなべ ひろこ 39歳

その日は、とても長い夜でした。深夜2時すぎ、2歳の長男が突然、

ケーンケーンと犬の遠ぼえのようなせきをしたかと思うと、ピューと口から吐しゃ物を出し、顔色は真っ青に。呼び掛けに反応なく、病院へ駆け込みました。

そして、診察。先生に、「急性喉頭炎こうとうえんです。呼吸困難の恐れもあるので帰せません。入院です」と告げられました。もう目の前が真っ暗です。実はそこからどう小児病棟まで移動したのか、今も思い出せません。

当時、私は授乳をしていて母子同室。しかも転落防止の1メートル近い柵付きです。最初の2〜3日は、私も夢中で子どもの世話をしていましたが、症状が安定してくると、

夜も寝れるほどに穏やかに時が過ぎていきました。

けれども人間って不思議なもので、家族からも世間からも隔離されると飽きるのです。しかも、突然の入院でテレビや本の娯楽もありません。子どもも私も病室から出たくて、ウズウズしていました。が、感染の恐れがあり絵本のあるプレイルームすら入室は禁止されていました。

苦しかったです。母親の私は元氣なのに、外へ行けない不満やイライラが募り、爆発寸前でした。ある日、もう衝動的に子どもを抱っこし、プレイルームへ行き、ひたすら遊びました。

スッキリしました。1時間くらい経ったのでしょうか。気付くと担当

の看護師さんがそばにいたのです。「○○くん、もうちよつとの辛抱だよ。あと少しお薬を続ければ、絶対治るから。だから、今日みたいに勝手に出ちゃダメ」

ハッとしました。看護師さんは、私の気持ちを知ってて、この時間を過ごさせてくれていたんだと。でももつと心に響いたのは、さっきの言葉を子どもにだけ向けて言ったことでした。言葉がまだ分らない赤ちゃんに向けてです。

私への思いやりで、私を「叱る」のではなく、こんな方法で諭してくれたのだと……。その後、ベッドの上で、子どもを抱きしめ泣きました。何やってんだろう……という反省と看護師さんの優しさに。

入選

残された紙おむつ

〈山口県〉
土田 葉子 つちだ ようこ
50歳

夫がくも膜下出血で倒れたのは、一昨年の11月。搬送先の病院で直ちに「残念ながら、もう二度とお話することはできません」と、宣告された。

私は、あまりの突然の出来事に、何が起きているのかがまるでのみ込めなかった。裂けた血管にコイルを詰める手術だけは、なんとか行うことができたが、厳しい状態に変わりはなかった。あと何日持つてくれるのか。夫の呼吸が止まった時に、果たして私は彼の死を受け入れることができるのだろうか。その瞬間が来ることを想像すると、怖くてたまらなかった。ただただ夫の手を握りしめるしかなかった。

「土田さん、買ってきてほしいも

のがあるんですけど」

入院から4日目のことである。とても気さくな、でも失礼でない話し方をする看護師さんに言われた。

「お酢と紙おむつと介護用の菌ブラシね。お酢はね、点滴の消毒に使うんです」

彼女の穏やかな明るさが、私の気持ちとを和ませてくれた。

「ご主人、経管栄養を始められまし、便もされているし。いい状態ですよ」

いや、そんなことはない。夫は助かる見込みはないと言われたのだ。でも、私は看護師さんの言われた品物を薬局で選びながら、なぜか心が弾んだ。夫の看護をしている

ような気持ちになったからだ。夫の死をただ待っているのではない。看護をしているのだ。そう思えて、少しでも気持ちに張りが出た。そう、歯磨きをしてもらって、気持ちのいい紙おむつを履いてもらおう。そう考えた。

その2日後に、夫は静かに息を引き取った。紙おむつ7枚だけを使つて。

今は、最後の看護に気持ちを向かわせてくれてありがたかったと、あの時の看護師さんに伝えたい。

入選

魔法にかけられて

〈広島県〉小川 亜衣子 おがわ あいこ 35歳

2014年8月20日未明に起きた土砂災害で、私の住む町は、今まで見た事のない光景へと変わった。

避難所へたどり着き、目まぐるしく変わる状況についていけない自分がいた。

体の不調が出て、毎日たくさんの医療チームとナースの方々に世話になった。

災害支援のナースの男性には、診察してもらっている間、自然と笑顔になる声掛けをもらった。診察中に笑顔になる経験。この避難所で笑顔になり、笑い声を出せたのが、初めてだった。

「早く良くなるかな？」

「いいが、家じゃつたら良くなるか

もしれんけど、環境が違うけえね」

広島弁の温かみのある言葉。彼の話術。ほこりした表情。私の心まで笑顔にしてくれた。数日後、福島からナースが来られた。母が、「今福島はどうですか？」と聞く

か起こらないんだ、と福島の人たちともよく言っていたんです」

福島の人たちの今までの経験で出た言葉。ずつしりと響いた。福島

と「普段通り生活しています」と近況を説明してくれた。

歴史があり、今がある。私の目の前にまぶしい光が見えてきた。まるで、言葉という魔法にかけられたようだった。

「これまでご支援ありがとうございます」と言われ、私は「お互いさまで」と言った。すると、母が災害が起きてから今までの思いを語りだした。母がこんなに災害について口にするのは、同じ思いを共感し話してくれたから。最後にこんな言葉をくれた。

「スピリチュアル的なことになるんだけど、耐えられる所だけにし

それから私の体調も落ちつきを取り戻してきた。あの日かけられた魔法は、今もそしてこれからも消えることができないようだ。

「看護の日」25周年特別賞

1990年12月、近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなんで制定された「看護の日」。今年は「看護の日」25周年を記念して特別賞を設けました。特別賞受賞作品は人気作家・桜沢エリカさんによって漫画化いたしました。

桜沢エリカさんには「忘れられない看護エピソード」の募集ポスターや「看護の日・看護週間」のポスターの製作にもご協力をいただきました。



「忘れられない看護エピソード」募集ポスター



「看護の日・看護週間」ポスター



桜沢エリカ プロフィール

7月8日東京生まれ。10代でデビューして以来、コミック誌やファッション誌、WEBなど多方面で活躍中。女性の心情をリアルに描写した漫画やイラストを多く手掛けるほか、そのファッションセンスも注目を集める。91～93年、名作「メイキン・ハッピー」で人気が不動に。常にその時々のおしゃれでカワイイものや場所に敏感で、軽やかで洗練された画風もその魅力を最大限に生かしている。97年飛鳥新社より選集(全10巻)刊行開始。粋なストーリーマンガを描く一方で「シッポがともだち」のようなエッセイマンガにも定評がある。



第5回
忘れられない看護エピソード

「看護の日」25周年
特別賞

わすれられないたん生日

〈新潟県〉入江 夏希 いりえ なつき 8歳

わたしは、夏休みにりよう親がはたらくお店でふざけてあそんでいて、ガラスで足を切る大ケガをしました。その時は、おこられると思つてイタイのをグッとがまんしてなきました。

びょういんについて、しんさつ室のベッドの上でふあんでいっぱいでした。そんなわたしに、ずっとやさしい声かけではげましてくれた1人のかんごしさんがいました。

先生が「これは、ぬわないとね」と言った二言で、わたしは今までがまんしていたなみだが、ワーと出て止まりませんでした。

かんごしさんが「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と声をかけてくれて少しおちついたら、お母さんが

「この子今日たん生日なんですわ」と言いました。そしたら、かんごしさんが「それならケーキよういしなくちゃね。でも、ここにはないか」と言つてわらわせてくれました。

それから足をぬいおわつて、ベッドの上でメソメソしているわたしの手に、3つのゼリーをギューとにぎらせてくれました。おどろくわたしに、かんごしさんは「しい。おたん生日おめでとう。こんなものしかなくてごめんね」と言つてくれました。かんごしさんのおやつをこっそりわたしにくれたのです。

わたしは、そのやさしさがうれしくて、うれしくて、足がイタイのもどこかへふつとんでいきました。

ゼリーはつめたかったけど、かんごさんのりよう手はとてもあたたかかったです。これから何年もやつてくるわたしのたん生日。わたしはきっと、毎年このイタくて、つめたくて、あたたかかった出来ごとをわすれないで思い出すんだろうなと思います。

わすれられない たん生日

入江夏希さん(新潟県)

今日は
私の8才の
たん生日

夜ごはんの後は
パースデーケーキを
食べるんだって

こら、なつき
お店の中で
ちよろちよろ
したら
あぶないわよ

楽しみで
楽しみで
もう――

あっ!!

なつき!?

ガ
シ
ャ
ッ

もう
だからお母さんが
あれほど!!



あ!!

いた…



タオルで
止血して

病院
いくぞ



泣かない

泣いたら

きつともっと

怒られるから



あー
またハデに
やったね

これは
縫わないと
ねー



!!

ぶわッ







縫合の用意
できましたよ
こちらへ
どうぞ



あは…



じゃあ
ケーキを
用意しなくちゃ

あでも
ここには
ないか



きずを
ぬうのは
思ったほど
いたくなかったけど

はい
おしまい

しばらく
ベッドで
休んでね



さつき
の
かんごしさん

あ

はい



…

なつきちゃん
どう？
入るね

こころが
へこんで
元気が出ない



このイタくて
つめたくて
あったかかった
出来事を
思い出すんだって
思います

これからも
毎年やってくる
私のたん生日に

内科に10年勤め看取りの看護をたくさん経験させてもらいました。今回、誰かに自分の経験した看護のことを聞いてもらいたい・伝えたいという思いで応募させてもらいました。辛いこともたくさんあったけどそれ以上の感動・ありがたさ・優しさを、たくさん感じることができました。まだまだ未熟ですが、高い意識と誇りをもって看護師の仕事を続けてきたいなと思います。

〈宮崎県 女性 看護職〉

看護エピソードを読むと、すがすがしい気持ちになります。素晴らしい企画だと思います。以前から募集は知っていましたが、今回、思いきって応募しました。

〈三重県 女性 看護職〉

何度も書き直し読み返しその時の気持ちがよみがえりました。教科書で学べないことが臨床で学べる「その瞬間」を大切に、看護の道を精進したいと思います。

〈茨城県 女性 看護職〉

毎年楽しみに拝見しています。みんなで忘れられない看護のエピソードを語り広げて行くことが、看護の喜びを感じ、やりがいにつながっていくと確信します。今日よりはさらに、忘れられないエピソードをつかめるように、日々、知識や技術を磨き、何よりも心を磨いてまいります。

〈東京都 女性 看護職〉

ご応募いただいた方々から たくさんのコメントが寄せられました！

難産で生まれ、アトピーや喘息などで病院のお世話になることが多かった息子。中でも小学3年生の時に肺炎で入院した時は、本当に心配しました。クリスマスを病院で迎えることになった息子に、サンタさんに代わってプレゼントを届けてくれた看護師さんの優しさは忘れることができません。慌ただしく退院してしまい、その後も仕事と育児に追われてお礼に何うこともないまま月日を重ねてしまいましたが、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

〈神奈川県 女性 一般〉

久しぶりに入院したら、若い看護師さんたちがテキパキと仕事をこなし、しかも患者一人一人に丁寧に優しく接しておられたので感動し、このことを誰かに知ってほしいと思い応募させていただきました。

〈兵庫県 女性 一般〉

初めてこの企画を知りました。看護師さんたちには大変お世話になり、言葉では表せないほど感謝しています。そのほんの一部を何とか言葉で表現してみました。

〈東京都 女性 一般〉

今回このような作文を書かせていただき、ありがとうございました。思い出しながらたくさん涙をこぼしました。「ああ、自分ってまだ泣けるんだな」と実感することができて良かったです。忙しい仕事の中、すっかり泣く時間を奪われていたようです。

本当にありがとうございました。

〈愛知県 女性 一般〉

感動をいつでもあなたの手のひらに スマホアプリ「忘れられない看護エピソード集」

「忘れられない看護エピソード」の歴代の優秀作品を、手軽にいつでも楽しめるスマートフォンのアプリが登場しました。心がじんわりと温まる話や思わず笑みがこぼれる話、涙なしには読めない話など、よすぎるのエピソードをぜひお楽しみください。

■収録作品:第1～5回の看護職部門／一般部門の最優秀賞、内館牧子賞、優秀賞、入選、「看護の日」25周年特別賞の合計102作品

■価格:無料(iOS版／Android版) ■ダウンロード:<http://www.nurse.or.jp/smt/>



今年で25周年!



看護の心をみんなの心に

**5月12日は
看護の日**

www.nurse.or.jp

【主催】厚生労働省／日本看護協会

【後援】文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会

【協賛】日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会
日本助産師会／日本精神科看護協会／日本訪問看護財団
テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／ナガイレーベン(株)／パラマウントベッドホールディングス(株)／
(株)ソシエ・ワールド／ワタキューセイモア(株)